
劣化の魔術師

カワウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

劣化の魔術師

【Zコード】

Z4305BA

【作者名】

カワウチ

【あらすじ】

夏休みのとある日に、古川大河は、熱中症で倒れた所を灰色のロープを身にまとった少女・シノに助けられる。

シノは自分の事を、魔王の娘と名乗り、異世界から逃げてきたと大河に告げる。

大河は助けてもらつた恩返しにて、シノのこちひらの世界での生活をサポートする役目を申し出るが……

プロローグ

中学生になつて二一度目の夏休みが始まって一週間。

本来なら、これから一か月ちょっと続く長期休暇に胸を躍らせていたはずのこの時期を実際迎えてみると、驚くほどにテンションが低かった。

夏休み開始一週間で此処までテンションが低いのは、恐らく初めてのことだらう。

公園のベンチでため息をつきながら自分の左足を見る。

包帯にグルグルに巻かれたギプスと手元に置かれた一本の松葉杖。これを見れば誰だって俺がどういう状況に置かれているか分かるだろう。

骨折。原因は後先考えずに行つた馬鹿な行為。

学校の急な坂を自転車で疾走していた所、自転車がパンクして身を放りだされた。

そのまま何の受け身も取れずに地面に叩き付けられ、左足を骨折。こんな事をしておいて骨折で済んだのは不幸中の幸いだが、不幸な事に変わりはない。

中一は人生で一番馬鹿な時期と言つるのは、強ち間違つていないようだ。

ちなみに何故運動もできない俺が公園のベンチに座り込んでいるかというと、これまた面倒くさい事情があつたりする。

「くそ……まさか幸運が不運に移り変わるとはな……」

先週から両親が海外出張、そして姉さんは海外にホームステイ中の為、俺は悲願の一人暮らしとなつた。

親や姉さんが居ると何かと制約が多い。あの時の俺は、自由な夏休みを目の前にして、一人ガツツポーズをしていた。

が、実際夏休みに入つてみればこのありますまだ。

少々家から遠い接骨院への移動は、両親が居ないため車が出せず、慣れない松葉杖を使って炎天下の中を歩かなくてはならなくなつた。

今は帰りだから少々気楽だが、行きの時はこの距離を報復しなくちゃいけないという絶望感に頭を抱えた。

両親が居なくなつて喜んでいたあの日の自分を殴りたい。

そんなわけで、中間ポイントである公園で、途中休憩の為にベンチに座つている。

それにしても最近の小学生は外で遊ばないのだろうか。三時前公園には誰もいない。

ついさつきまでジョギングしていた爺さんがいたけど直にどこかへ行つてしまい、公園に残つているのは俺一人。

「……しても今日も熱いな……」

今日最高気温三十五度だつて。こんな炎天下の中外に居続けたら、今度は熱中症で内科の世話になることになる。

変な幻覚とかを見る前に、早めに帰つた方がいいかもしれないな。

残りの距離を歩く覚悟を決め、松葉杖に手を伸ばしたその時、

「……え？」

俺は目に映つた不思議な存在に呆氣をとられて、伸ばした手をひっこめた。

樹木の死角となつている所から、同年代位の少女が姿を現した。

ショートカットの、とても可愛い女の子だったが、それだけでは呆気にとられたりなんてしない。

なんというか奇抜だった。

まるでRPGで魔道師が着ていそうな、灰色のローブを身にまとつている。

どう考へても日本で普段着として着る様な服ではないし、それを置いといても夏に切れる様な服ではないはずだ。

「これ……やつちまつたかな……」

熱中症で幻覚見るんじやないか？ こんなの絶対おかしいだろ。

いや、熱中症でこんな幻覚は見ねえか。よく分かんねーけど。

「…………そろそろ帰るか」

本当に熱中症にでもなつたりしたら面倒だ。

今度こそ松葉杖を手に取る。

使い始めて間もないからだと思つたが、どうも使いつづらこんだよなこれ。まあこれがなきや歩くことも出来ないから使うけどや。

松葉杖を使い立ち上がり、公園の出口に向かって歩きはじめる。

さて、残り四分の一の距離。頑張って歩きますか。

そう意気込んで、一步一歩と前に進む。

慣れない松葉杖を駆使し、数歩歩いたところで俺は立ち止まった。

「あれ…………んだこれ…………」

急に強いめまいが俺を襲い、視界がぐるぐると回った。

これって……マジで熱中症……。

バランスを崩した俺の体は、そのまま地面へと倒れ伏す。

覚えているのはそこまでだった。

口算のプロローグ 非口算のプロローグ

後頭部に柔らかい何かに乗っている。

枕つてこんなだったか？ ていうかなんで俺、寝てるんだっけ。

そうだ……たしか家に帰らうと思つて……熱中症で倒れたんだ。

重たい両蓋を開く。

すると、あの奇抜な服装の少女が目に映つた。

「あ、大丈夫ですか？」

俺の顔を覗き込んでそう言つた少女は、びくかほつとした感じで続ける。

「急に倒れたんでびっくりしましたよ。大事に至らなくて本当に良かったです」

此処が病院ではなく、公園の日陰な所を見ると、この子が看病してくれたと考えて間違はないだろう。

さつき幻覚扱いしたのを謝りたい。本当に悪かった。

といひの柔らかい感触はなんなんだろ？

冷静に考え始めると、数秒で答えが導き出された。

「うおああっ…」

自分でも良くわからない声を上げて起きる。

柔らかい感触の正体は、少女の腿。つまり膝枕。

「ん、んめん…」

俺が本能的に謝ると、少女は首を傾げて、

「どうして謝るんですか？」

と、聞いてくる。

どうしてっていわれてもなあ。

とりあえず膝枕の事は一旦置いておこう。なんか気まずくなる。

「あ、ありがとな。おかげで助かったよ」

俺を看病してくれた少女に、感謝の意を表す。

「はい。私の回復魔術が役に立つて良かったです」

「はい、ちょっとストップ」

え、何？ 回復魔術？

「え？ 私変な事言いましたか？」

「せつめの自分の発言を思い出してみる。なんだよ魔術って」

恩人にこんな事を言ひるのはなんだけど……」」の子……アレだろ？」

「魔術は魔術ですよ」

当たり前のよう言いつつ少女。

ああ、確定だわ。」」の子厨二病だ。それも結構重症な。

「あの、助けてもらつた奴にこんな事言つのもなんだけどさ、人前で魔術とかありもしない様な事を言わない方がいいぞ」

死ぬからな、社会的に。

「ありもしないって……魔術はありますよ」

まだ言つか。これは本格的にヤバいんじゃないか？

「じゃあよ、見せてみろよ、その魔術つて奴を。そつすりや信じてやるよ」

大体」」の手の奴は、」」」」」た状況に陥つた時」」」」」らしい。

」」の力は人前で使つてはいけないと、今日は調子が悪いとか。

」」の少女は、魔術で俺を助けたと言つているから、前者はないだろ。

おそらく後者の様なパターンで逃げるに違いない。

「わかりました。じゃあ見せてあげますよ。私の魔術」

「アレ? 見せねておこ……出来もしない事を宣言しておこでどうある気だ?」

「うーんと、何を使いましょうか……あ、そつだ

少女は俺の左足を指差す。

「「」の左足の怪我を治しまじゅつか?」

「治すつてお前……これ骨折だぞ? そつ簡単に治るわけねーだろ」

「その位だつたら一十分もすれば治りますよ」

少女がそつこうと、俺に向かつて掌を突き出す。

治るわけねーだろ。

心の中でやう壯き捨てて、少女が言い訳を始めるのを待つ。

「じゃあ、始めますよ」

少女がそういうと、少女の足元に黄緑色の魔法陣の様な物が展開される。そして間髪開けずに、俺を中心同色同型な物が展開され、それと同色の光の粒が、螢の群れの様に空へと上がっていく。

「……あ、うん。分かったよ」

俺は呟くようにそう言った。

「魔術の存在、認めてくれましたか？」

「今、俺は夢見てるんだ。きっと本当の俺は病院で点滴でも受けているに違いない」

だつてそうだろ？ こんなのが現実な訳がない。

「あんまりそんな事ばかり言つてると私は拗ねちゃいますよ?」

少女がなにか書いてゐたか
と/or もい。これは夢の話だ

さつさと頬をつねつて現実へと戻ろう。足が治るなんて夢を見て
も、起きてからが辛いだけだ。

右手で頬を摘み、
つねり上げる。

「どうですか？ 夢から覚めました？」

「……ここが現実でした」

一分間ほど粘つてみたが、全くもつて冷める気配など無かつた。

どうやら本当に現実らしい。

あれだけの痛みを感じたのにも関わらず、俺の足元には黄緑色の

魔法陣のよつたな物が展開されている。きっと魔法陣なのだろ？

魔法陣の外周あたりには、みたことの無い言語が並んでいた。呪文だったりするのだろうか。

「じめん、いろいろ疑つたりして。魔術の存在、認めるよ」

もう二つなら認めるしかない。

確かに魔術なんて夢の様な話だけど、確かに目の前で夢の様な事が現実に起きているんだから。

「分かってくればそれでいいです。別に怒つたりしてませんから」

笑つてそう言つ少女。

なんかすげえ良い奴だな。

「それにしても……まさか魔術なんてもんが実際にあるなんてな。ビックリだよ」

存在を認めてみると、なんか非常に興味が沸いてきた。

「なあ、魔術つてどうやつたら使えるんだ？ 教えてくれよ

「残念ですけど、人間に魔術は使えませんよ。魔術は悪魔の使う術と書いて魔術です

えーっと、つまりだ。この子の言つている事が正しかつたとする
と、この子は……。

「それじゃあお前が悪魔って事になっちゃうんだけど……流石にセ
れは無いよな?」

流石にそれは無い……よなあ。

でも魔術だつてあつたし、その仮説を否定しきれない。

「いいえ、私は悪魔です。この世界とは違う世界。いわゆる異世界
つて所から來ました」

本来な絶対信用しない様な話だが、魔術なんてもんが存在してい
ると知った今、もう何が正しくて、何が間違っているのかが分から
ない。

魔術があるんだから……人間そつくりな、異世界出身悪魔だつて
……居るよな?

「でもお前、どうからどう見ても人間にしか見えないんだけど。悪
魔つてみんなそんなのなか?」

悪魔つて、てっきりRPGのモンスターみたいな感じだと思つて
たんだけどな。

「悪魔は悪魔としてのランクが高いほど、容姿が人間に近くなるん
です」

ランクが高いほどつて事は、人間そのものみたいな容姿をしてい
るこの子は相当凄い奴なのか?

悪魔で一番ランクが高いって言ひたら……まあ魔王だらうな。

でもそんな奴がこんな所をうろついているとは思えないし、いわゆる四天王的な奴なのかな。

「あ、自己紹介がまだでしたね。私はシノット言います。えーっと……魔王の娘です」

「魔王の娘！？」

予想を遥かに上回つたなオイ！

「驚きました？」

「まあ……魔術の存在を知つた時位には」

魔術なんてもんを見たせいで、ある程度の事では驚かない自信があつたけど……これは流石に許容範囲を超えてるな。

魔王の娘つて……超大物じやん。

「えーっと、あなたの名前はなんて言つんですか？」

唐突にそんなことを聞かれた。

まあ自己紹介をされたんだから、こつちも名乗るのが常識か。

「俺は古川大河。よろしくな」

「はい。じゅうじょよろしくお願ひします、大河さん」

た、大河さんって……名前呼びかよ。

女の子に名前を呼ばれることなんか無かつたから、嬉しいのか……恥ずかしいのか。よく分かんねえ。

「えーっと……なれなれしかったですか？」

「いや、そんなことない。大河でいいよ大河で」

その方が断然いいに決まっている。

にしても魔王の娘ねえ。とてもそういうとは思えないな。

悪魔つてのはもつと極悪非道なイメージがあるけど、シノからは微塵もそんな雰囲気は感じられない。

普通に可愛い女の子って感じしか……しないんだよな。

「でも、なんで魔王の娘なんてすぐえ奴がこんな所をぶらついてる訳？」

ふと浮かんだので聞いてみる事にした。

「駄目なんですか？」

「いや、だめじゃないけど、一応身分が身分だから、特別な理由でもあるのかなって」

俺がそう聞くと、シノは黙りこむ。

やっぱり何か言えない特別な理由があるのだろうか。

またかこいつちの世界を侵略してきたとか……ってそりゃねーか。

シノがそんな事をすることは思えない。

勝手に考察していると、シノが沈黙を破つた。

「私は……逃げてきたんですよ」

「逃げてきたって……なにか嫌な事でもあつたのか？」

「……基本的に嫌な事しかないですよ」

シノは俯き、呟くように続ける。

「殆どの魔物は……人間を殺して世界を取ることしか考えていないんですよ。そんな気が無い私が、そんな中で生きるのって……どれだけ辛いか分かります？」

なんだよそれ……そんなの辛いってレベルじゃねえだろ……。

シノに人を殺す気はない。でも周りの連中は殺す。

それってつまり、平和主義の一般人が、テロリストの一昧の中に居る様なことだよな。

しかも魔王の娘なんて重荷を背負わされて。

「お前……そんな中で一人ずっと耐えてきたのか？」

「いえ、一人だったのはちょっとの間だけですよ……本当に少しの間だけ。私はそれが耐えられなくてこっちに逃げてきたんです」

それってつまりどういってことだ？

ちょっとだけってことは、シノの周りには仲間がいたのか？ それが一人になつたってことは何かあつたのか？

俺がシノの言葉の意味を必死に探つていると、シノがその解を語り始めた。

「私には……双子のお兄ちゃんが居るんです。人間と戦うのに乗り気じやない私を、周りの悪魔から守つてくれたお兄ちゃんが」

兄つてこうと……魔王の息子つてことになるのか。

「お兄ちゃんも人間を嫌つてませんでしたし……まあ私と違つてお兄ちゃんは世渡りが上手かつたですから、他の悪魔の前でそんな素振りはみせませんでしたけど」

懐かしそうに語るシノだが、ここで少し間が空いた。

なにか辛い事があつたんだろ?なと言つことは、俯いたシノの顔を見れば直に分かる。

「でも一か月前、突然お兄ちゃんがいなくなつたんですね」

「いなくなつたつて……まさか死んじまつたとかじゃ」

「そんなわけないです！」

シノは感情的になつて叫ぶ。

「そんなわけ……ないですよ……」

涙をこじらながら震えた声でしゃつぱつシノ。

「悪い。魔王の息子だつたら……そう簡単に死なないよな」

シノは黙つて頷く。

「その兄貴がどこにいるか分かるのか？」

シノは口を開いたまま答えようとしない。

多分知らないだろう。知つていたらもう少し違つた反応を見せるはずだ。

「じゃあ、どうしていなくなつたのか、知つている奴いなかつたのか」

「……父や、その周りの悪魔達は、みんな知つてゐる雰囲気でした。でもみんな知らないふりをして教えてくれませんでしたよ」

それつて、そいつらがシノの兄貴を……いや、仮にも魔王の息子だぞ？ 自分の後継者を消す様な事を、魔王がするとは思えない。

「それで、兄貴がいなくなつたから、そつちの世界に居られなくな

つたつて事が

「……はー」

そう言つてシノは頷く。

支えだつた奴がいなくなる。支えがあつても辛い様な場所で、その支えなしで生きていくなんて不可能だらう。

一か月前に消えたつて事は、もしシノがこいつの世界に来たのが昨日今日の話なら、一ヶ月間もその環境に居たことになる。

多分本当に昨日今日の話なんだらう。この服装で町を出歩いていれば、少なくとも噂ぐらうにはなつていいはずだ。

やっぱり一ヶ月近くあの環境に居たつて事なのだろうか。

「それで、こいつの世界に来たすぐに大河さんが倒れるといふを見て、今こいつしているわけです」

本当に一ヶ月もそんな所に居たつてのかよ。考えただけでゾッとするな。

「それで、お前はこれからどうすんの？ これから的事とか考えてんのか？」

俺はシノにそう尋ねた。

出来ればこの子の力になつてあげたい。俺にできる事ならやつてしまおう。

恩人にこんな話されたら嫌でも助けてやりたくなつてくる。

「EJたちの世界の事は、悪魔がない世界つて事ぐらいしか知りませんから、どうすればいいかなんて分かりません。まあ、まず寝床を探さなくてはいけないって事位は分かつてますけど」

本当にどうするつもりだ？

世界が違えば通貨も違つだらうし、寝床だけではなく、食べ物にありつけるかどうかも分からぬ……いや、分かる。無理だ。

普通の家出ならともかく、異世界からの家出となると、ハードルが高いな。

俺はこの子の協力に何ができる。

寝床探し……んなもん直には思いつかねえし、なんかねーかな。

「あ、そうだ」

寝床提供！ これどうだ？

家には誰もいないし、女の子一人ぐら^イ止めても問題ない……わけ無いよなあ。

男友達を止めるのとはわけが違う。

それってつまり、女の子と一緒に屋根の下つて事だよな。いろんな意味で大丈夫なのかこれ。

でもまあ、俺にできんかんな事つてこれ位しかないしな。

「とつあえず、俺ん家の部屋空いてるけど……使ひっ。」

なんか凄い緊張したが、なんとか聞けた。

「え？ いいんですか！」

「まあ、足の事もあるし……なによつこいで放つておいたら心配で
しょつがないつづーか」

「じゃあ……お願いして良いですか？」

とつあえず、異性が泊まるといつ点以外は何の問題も無い。

さつきシノに言つた通り部屋は空いてるし、金だつて結構な額が
生活費として送られてきてる。通院費だつてもう必要なくなつた
し、一人分の食費が増えた位問題ない。

「おひ、大丈夫だ。歓迎するぜ」

「あ、ありがとひやひこますー。」

やつぱ女子に感謝されるつていいもんだな。思に切つて提案し
て良かつた。

「それじゃあ……よろしくお願ひします、大河さん」

「じゅうりんわ。よろしくな、シノ」

そう返した俺の足元に展開されていた魔法陣が、徐々に薄くなつて消滅した。

治療が終わったのだろうか。

「終わりましたよ。もう普通に立つても大丈夫なはずです」

「お、マジで?」

久しぶりに両足を使って立ち上がる。

痛みは無い。久しぶりなので違和感があるが、確かに足が治つている。

「すげえ……本当に治った」

やつぱり魔術って凄げえよ。本当に漫画みたいだ。

「どうですか? 足の調子は」

「元通りだよ。本当にあつがとな

「どういたしまして」

シノは笑つてそう言つた。

「じゃあ、とりあえなく今は熱いし、さっそく俺ん家に行こいつだ」

「はーー。」

「元気よく歩き廻したシノはゆっくりと立ち上がる。

「あ、それこそえれば俺の松葉杖は？」

使わないことはいいえ、病院の借り物だ。ちやんと持つて帰らねば。

「あ……起きなはなしです。すこません」

「マジでっ。」

「……すこません」

まあ責めたりはしねえけどよ……せいか誰かに取られたりしてないだろ？

「とつあえず松葉杖回収して、家に向かつか」

「はい……残つてると良いですね、松葉杖」

残つていないと困るんだが。

ちやんと松葉杖が残つてゐる事を祈りながら俺達はその場を離れた。

初めての日本文化

どこかの親切な人が落ちていた松葉杖をベンチに立てかけてくれていたらしく、直に見つけることが出来た。

しかしああ、しつかりと両足で歩けるのに松葉杖を持つているつてのも不思議な光景だ。

そもそもって俺の隣には不思議な服を着た悪魔の少女が居る。

そもそもって俺の隣には不思議な服を着た悪魔の少女が居る。それ違った人が、不思議そうな目で見てくるのも、この服装が原因だろう。

とりあえず服装をなんとかしないとか考えつつしばらくなつて歩いてよかつたと痛感するな。

松葉杖の頃と比べると大幅なタイム更新だ。改めて治つてよかつたと痛感するな。

「よし、着いたぞ」

何処にでもあるような一軒家。それが俺の家だ。

「さ、入れよ」

「お邪魔します」

そう言って家中に入ったシノは、なんだかウキウキはじめた。

あれだろ。引っ越ししたりしたときには、目新しい新居をみてテンションが上がるのと同じだろ。

俺も小三の時に此処に引っ越ししてきた時に、目新しいこの家を見てテンションが上がったもんだ。

普通の引越しであれだけテンションが上がったんだがら、異世界から来たシノはもつとすごいに決まっている。住宅事情も違つてゐるだろ？、目新しいだろ？

「私の居た世界と随分と違いますね。凄いです」

「よく普通の間取り。よく普通の家具なのだが、やはり珍しい物は凄く感じるのが人間だ。いや、シノは悪魔か。

「まあとつあえずあがれよ」

玄関で靴を脱ぐと、シノは不思議そつて、

「イリハの世界では靴を脱いで生活してるんですね」

「まあ国こもよゐだぞ、日本じゃこんなもんだよ」

そう返して家に上がり、とつあえず居間に足を運び、部屋の隅に松葉杖を置く。

明日あたりに返しに行へか。もう必要ないし。

どうやって説明しようかな。急に治つたなんか説明出来ねーぞ。

「あ、その辺座つて」

まあこの事は後々考えて行こう。それより今はシノの事が先決だ。

「今お茶入れるから」

そう言つて隣の大所に向かつ。

茶葉とお湯を急須に入れ、湯呑に注ぐ。

お茶菓子も一応用意するか。ちょうど来客用の羊羹も有るし

この前食べただけど、おいしかったなコレ。

多分喜んでくれるだろう……多分。

なんかシノの服装を見る限り、和風ではなく洋風の文化が広がつていそだだから、こういうのは口に合わないかもしれない。

ま、今家に有るのはこれだけだから、どうしようも無いんだけど。

それらをお盆に載せ再び茶の間へ戻った。

「お待たせ」

テーブルに一人分の茶碗と羊羹を置いて、シノの対角線上に腰を下ろす。

「えーっと、これは?」

ああ、シノの世界には煎茶や羊羹が無いのか。勿体ないなあ。

「煎茶と羊羹。つまいから食べてみるよ。」

「あ、
はい」

そう言つてシノは羊羹を口に運ぶ。

「あ、甘くておいしいです！」

シノの顔が、無邪気な子供の様な笑みを浮かべる。

どうやら甘い物が好きみたいだな。

女の子は甘党が結構多いみたいだけど、どうやらそれは悪魔も同じ。

「そりや良かつた。あ、煎茶も飲んでみろよ。おいしいから」

俺が進めるごとに、シノは湯呑を両手で持ち、

「それにしても、黄緑色の飲み物なんて初めて見ましたよ」

不思議そうに煎茶を眺めたシノは、恐る恐るといった感じで、煎茶を啜る。

「……おこしいですね」

じつやうじゆうちゅうせんじも好感触だつたらしい。

「気に入ってくれたなら良かつたよ」

笑つてそう言ひ返しに、俺は笑つてそう返した。

魔術○「超能力

「そういうえばさ」

お茶を飲んで一段落すると、色々と疑問が浮かび上がってきた。

「お前つてさ、異世界から逃げてきたんだよな」

「はい、そうですけど」

「追っ手とか来ないわけ？」

仮に悪魔が追つて来ようものなら、バトル漫画の様な展開が起き
そうだが、残念だが俺にはそれを対処する術がない。

魔術とか使えないから、バトルなんて専門外だもんな。

「まあそれなら大丈夫だと思いますよ」

「どうして？」

「逃げるからにはちゃんと足が付かない様にしてますし、それに悪魔からしたら、こっちの世界は人間
しかない、いわば敵地ですからね。そう簡単に踏み込んで来れませんよ」

「なるほど……でもお前、魔王の娘なんてポジションじゃん。それ
つて意地でも連れて帰るつとするんじゃないのか？」

「いや、それは無いと思います」

シノはきつぱつと言い切った。

「今は勇者との交戦中ですから、少しでも戦力が欲しい所でしようと、転移魔術が使える様な高等悪魔を敵地のど真ん中に送る様な真似はしないと思いますけど」

そんなもんなんだろうか。仮にも自分の娘なんだから、意地でも連れ戻すと思うんだが、そこは人間と悪魔の考え方の違いだろうか。「それに私はお兄ちゃんと違つて、連れ戻しても戦力になりませんから。だから父にも嫌われてましたし」

子供が自分の理想から遠いから嫌うつて、最悪な親だな。

まあ今回の場合、嫌っていたおかげで助かつた訳だが。

にしても勇者ねえ。本格的にファンタジーな世界だな。

「ていうか勇者と交戦中つて、人間は魔術が使えないんだろ? よく魔術が使える悪魔と戦えるな」

たとえ戦いのプロでも、魔術が使える相手と戦うとなると、相手にならないだろ? プロボクサーが戦車と戦う様なものだ。

「そんなこと無いですよ。人間には超能力がありますから」

「超能力?」

「はい、超能力です」

えーと、超能力っていうと、テレビとかでたまに特集が組まれて
いる、あの胡散臭い奴か？

「えーっと……たとえばどんなのがあるんだ？」

「本で読んだのですと……念力だつたり……」

ああ、例の胡散臭い奴だわ。本当に超能力だつたんだな、アレ。

「あと、手から炎を出したり……」

パ、パロキネシスって、そんな漫画の代表的な能力を、リアルな
人間が使えんのか！？

「とにかく色々ありますよ」

すげえな、人間にもそんな能力が備わってるのか。

となれば当然この事が気になつてくる。

「超能力って……俺にも使えるかな」

本当に存在しているつて分かつたら、やはり使いたくなつてきた。

パロキネシスとか使ってえな……いや、でもそんなもん使えたら
家火事になりそうだな。もつと他の物が使いたい。

「それはちょっと分かりませんけど、可能性はあると思いますよ

「可能性ねえ……」

それは一体何パーセントくらいなのだらうか。

仮に俺が超能力に目覚めたとして、俺は一体どんな能力を使うことができるんだろうか。

「つで、こんなもん考えても仕方がねーよな」

考えたって何か変わるわけでもない。いくら未来予想を立てたって、それが現実になるなんて事はきっとないんだから。

「なあシノ。お前つて他にどんな魔術使えんの?」

俺は興味を超能力から、目の前に確かにある異能に向ける事にした。

「他の魔術ですか?」

「おう、他の魔術。なんかもつと……派手な奴

さつきも話題に出た炎を操るとか……あ、やっぱ炎は家が燃えそうだから勘弁してほしいな。

「あ、攻撃魔術とかは止めてくれよ」

炎だけじゃなくとも、攻撃系の魔術全般をこんな所でぶつ放したら家所か、こじり一體が消し飛びそうだ。

「心配しなくとも私はそんな物騒な術式は使えませんよ。ほり、さつき戦力にならないとか言ってたじゃないですか」

ああ、言つてたな。

戦力外って、てつきり戦う気が無いから使えないって意味だと思つてたけど、どうやら違つたみたいだ。

いや、違つては無いか。

シノに戦う気が無いのは事実だらう。

「ていうか全く使えないのか？ 魔王の娘なんだから、何かしら使えると思つたんだけど」

「はい、使えませんね。下級魔術ですから扱えませんから」

「まあお前が、町を破壊できるような魔術をぶつ放している所なんて、想像もつかないけどな」

「どちらかといふと、結界のような物で攻撃魔術から周囲を守つている様なイメージがある。

「守る方なら得意なんですけどね。

予想通りだな。

「じゃあその守る術つて奴を見せてくれよ。肉眼で確認出来る様な奴」

俺がそうリクエストすると、シノは「ココと笑つて、

「分かりました。じゃあ私のとつておきの魔術を見せてあげます」

と、言つて立ち上がつた。

とつておきか。どんなのが出てくるんだろつか。

「じゃあ始めますよ」

シノがそう言つと、シノの足元に魔法陣が展開される。今度は黄緑色ではなく水色だ。そして回復魔術の時と同じように、外周を記号が埋めている。

静かに展開されていた回復魔術と違つて、僅かだが魔法陣から風の様な物が発生しているのが分かる。そよ風と言つた感じだ。

ああ、なんか扇風機の弱みみたいで気持ちいい。

「こきますよ！ 大河さん、見ててください」

シノがそう言つて俺の方に右手を突き出すと、水色の半透明な壁が出てきた。

シノを覆う様に半ドーム状で形成されている。

RPGや漫畫だと結界とか言われている奴だ。

「す、すげえ。」

「これ凄く堅いんですよ。殴ってみます?」

「いや、それは遠慮しておくれ」

そんな壁を殴る様な真似はしたくない。だって手が痛いじゃん。

「ちなみに凄く堅いってどのぐらいだ?」

「殆どの攻撃を防げると思っていますよ。この二つ魔術だけが取り柄ですから」

シノは笑つてそう言つ。

「……こしても本当にすぐえなこれ」

そんな事を呟き、結界を右手で触れる。

俺も……こんな力が使えたら良いのに。

そう思つた時だった。

「な……ッ!」

右手が急に熱を持つたと思つと、今度は軽い頭痛が俺の脳を襲つた。

しかし直に右手の熱は消え、頭痛も治まつた。その変わりと言わんばかりに、俺の頭に何かが流れ込んでくる様な感覚に見舞われ、その不思議な感覚に、俺は反射的に右手を頭部に伸ばす。

「なんだ……」「」

頭を抱えながら、今の状況を分析する。

流れ込んできたのは記号の羅列、……魔法陣の外周に浮かんでいたアレと同じじやねーか？

正確には記憶していなかつたけど、多分あつてこるはずだ。

なんでこんなもんが頭の中に……。

「だ、大丈夫ですか！」

シノが結界を解いて、慌てて駆け寄ってくる。

「別に痛いってわけじゃないから大丈夫だとは思ひつけどよ……」

とりあえずこの記号の事は、俺の知識だけじゃどうにもならない。シノに伝えた方が良いよな。

「なあ……あの魔法陣の周りに書いてあつた記号……ってか文字？あれは何なんだ」

「あれは……魔術言語です

「魔術言語？」

「はい、そうですけど……」

魔術言語……やっぱり魔術関連か。

だとしたらなんで俺の頭に入ってきたんだ?

「あの……どうしたんですか? そんな事を聞いて」

「流れてきたんだよ」

「流れてきた?」

「ああ、その魔術言語って奴が頭の中に入ってきたんだよ」

シノは俺の言葉を聞いて一瞬呆けるも、直に我に返つて唸りだす。しばらぐして、何か分かつたように口を開いた。

「大河さん……その魔術言語、まだ頭の中に残つてますか?」

今は入つてきているつて感じは終わつて、その魔術言語がぼんやりと頭の中に浮かんでいる状態だ。

「ああ、残つている。ぼんやりとだけどな」

それを聞いて、顎の下に手を置き、探偵の様に唸りだすシノ。

「大河さん、本当に仮説なんですけど……」

そう前置きして、シノは言つ。

「もしかして……今なら魔術が使えたりするんじや……」
居間に沈黙が訪れた。

シノ、今、なんて言つたんだ。

魔術が使える? 確かにそつ言つてたよな。

でも、そんなの矛盾しているだ。

人間に魔術は使えない。俺と出会つた時に言つてたじやないか。

尚も俺の頭には魔術言語が存在している。

「大河さん……その魔術記号を……選択してください」

「選択?」

なんだそりや。まるでゲームのウインドウから呪文を選ぶみたいだ。

「えーっとなんといつか……その言語を使つーって感じでイメージをしてみてください」

「あ、うん。やってみる」

なんだかよくわからないが、全く知識が無い俺はシノに従うしか術がない。

選択……選択……これを……使う…

既に頭に浮かんでいる魔術言語を必死にイメージした。イメージ

とこうよつ心に焼き付けるといった表現の方が正しいのかもしねない。

そして一瞬。体が軽くなつたような錯覚に陥つた。

「なんだ……魔法陣……？」

そして俺の足元には水色の魔法陣が展開され、辺りにそよ風が漂つていた。

そして魔法陣の外周には、さつきから頭に浮かび続いている魔術言語が記されていた。

「やひばつ……魔術……」

シノが呆気に取られたよひばつ壁へ。

まさか使えるのか……あの結界を。

何故かはわからないが、使い方が分かる気がする。

結界を出したい方角にこの右手を突き出して、結界をイメージすればいい。

右手が震える。

つい数時間前まで、魔術や超能力なんて異能はフィクションだと思っていた。

それを、その異能を俺が使おうとしているんだよな。

「やべ……緊張してきた……」

なにせ使えるはずもない魔術を使おうとしているんだ。緊張位する。

……心の準備だ。深呼吸しろ。

息を吸って吐く。この動作を計二回続けて、

「よし……せるかー！」

俺は正面に右手を付ぎだす。

「……行くぞー！」

イメージする。やつを見たあの結界を。

刹那。俺の正面に、水色の結界が出現した。

シノの様にドーム状の結界ではなく、俺のは正面のみを覆っていく。

「これは……結界……ですよね？」

「俺が……つかったんだよな

「みたい……ですね……いや、でも……」

シノは、まるで俺が初めて魔術を見た時の様に、目の前の状況を

把握しきれていないらしい。

使った本人である俺だつて、理由が全く分からぬ。

なんで人間の俺が魔術を使えたのか。

「大河さん、もしかして今の……超能力じゃないですか？」

シノがそんな事を言った。

「超能力って……」の結界つて魔術じゃないのか？」

「いえ、確かにそれは魔術ですけど……私が言つてるのはその前です」

「前？」

前つつーと、頭痛とか右手の熱とかの事か？

「あくまで仮定なんですけど、大河さんは私の魔術をコピーしたんじゃないですか？」

「コピー？ そんなのどうやって？」

「そこで超能力ですよ」

俺は自分の右手を見て、再びシノの方を見る。

「じゃあなにか？ 俺が魔術をコピーする超能力を持つていて、その力で魔術をコピーしたと」

「まあ、そうなりますね。といつかそれ以外考えられません」

「まてよ、それだつたら、

「じゃあなんで公園に居た時、俺は回復魔術を「ヒュー出来なかつたんだ？」一応手も触れていただろ？」

足を治療していたと思われた回復魔術。実は全身に作用していたみたいだ。先日、晩御飯の調理中に左手の人差指にできた切り傷。ほぼ塞がっていたその傷は、綺麗さっぱり無くなっていた。どう考えても回復魔術の効果だろう。

「きつと何か能力を発動する条件があるんですよ。あの時と今、なにか違いはありませんでしたか？」
「なんだろう、なにか有ったか？」

必死に考える事、約十秒。

「あ、もしかして」

それっぽい違いを発見した。

「結界の時に俺、こんなのに使えてえなみみたいな事を考えてたんだよ。もしかしてそれじゃねえのか？」

「多分それですよー！」

「おお、マジでかー！」

欲しいと思えば手に入る。す、すげえ……。

まあ確証が持てないから、後でもう一回くらいいしノに魔術を使つてもらつて実験してみる事にしよう。

「やついえば……」

結界を張つた時から、少々気になつた事があつた。

「この結界で、シノのと比べてシヨボくないか?」

なんだか一回も一回りも小さい程小さい。体勢を低くしてやつと全身を隠せる程度の大きさ。大体直径で一メートル位だらうか。

あと何か色が薄い。なんといつか……脆そつだ。

「あれか? 経験不足つて奴かな?」

「強度なんかは術者によつて変わつてきますけど……大きさとかは変わらないはずなんですが……」

え、じゃあなに? なんでこんな事になつてんの?

これじゃあまるで劣化ゴペーじやん。

「もしかして大河さんの能力、ゴペーとかじやなく……劣化ゴペー?」

言われたああああああつ!

薄々自覚していても、他人から言わると心にザクッと来るものがある。

俺は肩をがっくりと落とし、

「ま、まあ。劣化コピーだらうと使えたことには変わりないし。人間が魔術を使える事自体が異常なんだから、きっと中身は劣化でもやつてこることは凄いはずだ」

ひたすら自分は凄いと言い聞かせた。

落ちついて考へる、本当に俺は凄いんだ。ナルシスト的な意味ではなく。

「でも良かつたじゃないですか。超能力が使え

超能力って言つて良いのか、魔術って言つて良いのか分からぬけどな。

まあそれはどっちでもいい。

「そうだな。これで十分だよ」

結界を解除する。

発動時もそうだったが、今回も解除の仕方が何となく分かった。

消そぐと思つたら消える。実に簡単な作業だ。

使い方が分かるのも、この能力の特性なのだろうか。

ちなみにこの結界。手を動かせば結界が追尾してくる。超便利そうだ。丈夫かどうかは別としてだ。

「そういえば、魔術を使うのに魔力とかそういうた類の物つて使わないのか？」

なんとなく気になつたから尋ねてみた。

RPGなんかだと、魔術を使うのにはMPなんてもんを使つたりするし、現実でもそうなんじゃないかなと思うんだが。

「使いますよ？ 魔術は魔力を力に変えて使う術ですから」

「俺が魔術を使つたって事は、人間も魔力を持つているんだよな。人間は何に魔力を使うんだ？」

まさか宝の持ち腐れつて事は無いだろうな。

「超能力です。魔術と超能力の違いを大雑把に言つと、魔力の出力形式の違いだけですから」

出力形式の違い……ね。

「ところでシノ。さつきから頭の中に魔術言語が浮かびっぱなしんだが、何とかならないのか？」

こればっかりは消し方が分からない。

「うーんと……普通に魔術を使うのを止めようつて思えば消えると

思こまかよ

随分と簡単だな。簡単に越したことは無いが、もつと凝つてあった方がカッコイイと思つ。

「分かつた……とまあえず消してみる」

「うあえず一回魔術は止めよう……あ、すぐえ。綺麗やつぱり消え去つた。

「使おうと思った時は使おうと思えばまた出てきまますよ」

もつ一度使ひ……出でた。本当に簡単だなオイ。

そう思いながら、俺は魔術言語を何度も何度も出し入れした。

本当に、魔術が使えるようになつたつて事を改めて自覚する。

でもこれ……使う場面あんのかなあ。人前で使つたら騒ぎになりそうだし。

騒ぎと言えば、シノの服装だ。

「そのまま街中を歩けば、騒ぎつづけより変なつわさが立つ。

「なあ、シノ。突然だけども、お前その服以外に服持つてきてねーの? その服じじゃ立つだろ?」

魔術とかで四次元に収納とかしていなかの? そんな事ができるか自分で分かんねーけど。

「えーっと、持つてないですね。そもそも私の居た世界とこっちの世界は衣服の文化が違うみたいですから、仮に持つていたとしても、こっちの世界じゃ目立つてしまつ様な服しかないですから意味がないと思います」

「ああ、そつか。そりゃそうだよな。
でもどうしようか。

こんな状態で外に出すわけにもいかないし、かといって家から一歩も出さないなんて事はしたくないし。

「しょうがねえ、姉さんの部屋から勝手に持つてくるか」

「どうせホームステイ中だ。バレやしない。

で、姉の服を着て、何かしらの服を買わせればいい。これが最善の選択だろう。

「勝手に着ちゃって大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ」

……多分な。

ピフォーアフター

姉さんの部屋から、適当に服を持ってきた。

やはり勝手に部屋の中の物を押借するのは、少々気が引ける行為だったが、姉さんだつて俺の部屋に勝手に入つて荒したりしてたら、文句を言われる筋合いはない……と、言いたい物の、男と女は違うからな。なんとなく俺が悪い気がする。

そう考えると、罪悪感が沸いてくるな……まあ背に腹は代えられないから、仕方ない。

とりあえず俺は悪くないと、自分で言い聞かせよう。

もうすれば少し気分が楽になるはず。

俺は悪くない、俺は悪くない……よし、これで多分大丈夫だ。

さて、今回姉の部屋から押借してきたのは、カジュアルな洋服とスカートだ。

いかにも今風の服装と言つて良いだろう。

なんとなくこれに決めた。別に俺の好みは反映させていない……
断じて反映していない。

そんな上下一式セットで手に、今の襖を開く。

「とりあえず適当に持つてきた」

綺麗に畳まれた衣類を、正座でひょいと座つてこるシノの前に置く。

「多分」「この着てたら、全然問題ないと思つ」

「な、なんか……カワイイですね」

「うん、可愛いと思つ。服に興味深々なシノが。

着替えたらどんなふうになるんだろうか。

可愛いんだろうな。

「あの、大河さん」

頭の中でイメージしていると、シノが声を掛けってきた。

「ん、なに?」

「あの、着替えたいんで……出でてもいいると助かるんですけど……」

「あ、悪い」

俺は慌てて部屋から出た。

着替えたいって事ぐらい察しろよ俺。

「ビ、ビウですかね。似合ひますか？」

アニメや漫画で定番となつてゐる様なラッシュキースケベ展開に陥ることも無く、シノの着替えは終了した。

あれつて、現実でやると相当ヤバいと思つるのは俺だけだろうか。仮に相手が他人だったら、起訴されるかも知れない。

まあそんな事は置いておいて、シノの着こなしこについてだが、

「す、凄え似合つてるよー。」

言葉に偽りはない。とにかく似合つていた。

これは後で姉さんに怒られたとしても構わない。そう思わせるほど似合っていた。

「そうですか、それなら良かったです」

シノは万弁の笑みでそう言った。

「それにしても……これ、スカートが短いですね。こんなもんなんですか？」

「い、こんなもんだと思つ」

「い、これが普通だと思つ……普通だよな？」

もう一度言わせてもらひうが、このチョイスに俺の好みは反映されてない。絶対にだ！

「……なんか恥ずかしいです」

シノはボソリとそんな事を言つ。

ま、まあ確かに、全身を隠す様なローブから一転、現代人御用達のスカート……いや、御用達かは男の俺には分からんが、とりあえず急に露出が多い服装になつたら恥ずかしいだろう。

「で、でもに有つてるぜ。大丈夫だ」

……なんにせよこれで問題はクリア……だよな？

「とりあえず、これで外を出歩けるな」

「そ、そうですね。少し恥ずかしいですが……」

シノは顔を少々赤らめてそう言つ。

なんといつか……恥ずかしそうにしているシノ、可愛いなあ。

そんな事を考えながら、俺は部屋に掛けた時計を眺めた。

もう夕飯の買い物にでも行つた方が良い時間だ。

本当は医者の帰りに寄つて行こうと思つたんだが忘れてた。

「なあ、今から買いたい物行くんだだけビ、お前も行くへ？」

「は、はー。私も行きますー！」

シノが元気よく主張する。

「じゃあ決まりだな」

財布を手に取る。

「じゃ、せつと行くぜ」

「はー」

そういうふた会話を交わした後、俺達は家を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4305ba/>

劣化の魔術師

2012年1月12日18時52分発行